



平成30年12月28日発行

第 107 号

事務局 〒169-0051 東京都新宿区
西早稲田2-18-23スカイエスタ507
TEL/FAX 03-6457-3921
E-mail n.s.e.g@d7.dion.ne.jp
<http://www.seishineisei.gr.jp/>

〈目 次〉

日本精神衛生学会『大会へのお誘い』……………	1
日本精神衛生学会『第34回大会の詳細』……………	2
公認心理師制度推進連盟総会のご報告……………	3
学会主催のワークショップを開催しました……………	3
ワークショップを振り返って……………	4



大会へのお誘い

第 34 回大会副大会長 末木 新(和光大学)

第 34 回大会の副大会長を仰せつかりました和光大学の末木新です。大会長(菅野恵先生@和光大学)の設定した今大会のテーマは、「子どもから学ぶメンタルヘルス」となっております。子どもという視点から我々が日々接しているメンタルヘルスに関する諸問題を改めて眺めてみることにより、様々な気づきが得られるというのが本大会の趣旨です。

私自身の専門は自殺学です。一般に子どもの自殺率は非常に低く、大人と比べた時に自殺で亡くなることはほとんどありません。なぜ子どもは自殺をすることがほとんどなく、大人になるとそれが急激に増えるのか、という問いを考えると、自殺予防戦略を考える際のヒントが見えてきそうです。同時に、世代という観点に着目すると、また面白い発見があります。例えば、ここ 10 年ほどで 20 歳未満の世代を除くあらゆる世代の自殺率の世代間差が急速に縮まってきているのですが、これが社会のどのような変化を反映しているのか、と考えてみると、これもまた非常に示唆に富んだ答えが得られそうです。

このように、我々が日々の業務の中で関わることのある様々な精神衛生に関する課題も、「子ども」というフィルターをかけて問いを発することで、新たな側面が見えてきます。そのような発見を期待しながら、皆様の発表／来場を楽しみにしたいと思います。どうかお誘い合わせいただき、多くの方に参加いただけますよう、お願い申し上げます。

第 34 回大会の詳細

会場・周辺案内

本大会は **2019 年 2 月 15 日(金)～17 日(日)**に開催されます。場所は和光大学ポプリホール鶴川です。新宿駅から小田急線で約 40 分の小田急線「鶴川駅」から徒歩 3 分のところにあります。

和光大学ポプリホール鶴川は和光大学とネーミングライツ契約を結んでいる東京都町田市の公共施設になり、図書館、音楽ホール、喫茶店なども入っております。鶴川駅は和光大学や国士舘大学(町田キャンパス)の最寄りの駅になりますので、会場となる駅の周辺にはコンビニ、スーパーや喫茶店などの商業施設等も一定の規模のものが揃っております。食事につきましては、和光大学ポプリホール鶴川内のみならず、駅周辺でとっていただくことも可能となっております。

プログラム

大会の詳細につきましては、下記 URL(<https://seishin34th.jimdo.com/>)をご参照ください。以下では、3 日間の大会の概要についてご説明させていただきます。

➤ 2 月 15 日 (金)

一般公開シンポジウム「児童虐待と自殺の問題から子どもの未来を考える」およびワークショップ「子育て支援に活かすタッチング～タッチが伝えるメッセージ～」を予定しております。シンポジウムでは、前川あさ美先生(東京女子大学教授)の講演の後に、大会長である菅野恵(和光大学准教授)と私からの話題提供をさせていただきます。ワークショップは麻生典子先生(神奈川大学准教授)、福島里美先生(日本女子大学兼任講師)にご担当いただきます。いずれも、一般公開で実施をし、地域の方々にもご参加いただけるような形になるようにしていきたいと考えています。

➤ 2 月 16 日 (土)

大会長講演、教育講演、特別公演、ポスター発表が行われます。大会長講演では、今大会の大会長である菅野恵先生の講演が実施されます。教育講演では、岩原香織先生(日本歯科大学准教授)に「歯科法医学における子どもとの関わり」と題した講演を、特別公演では、山本和智先生(作曲家／和光大学非常勤講師)に「シンプルな創造と子どもの(ような)音楽」と題した公演をいただきます。

➤ 2 月 17 日 (日)

理事長講演、教育講演、記念講演、シンポジウムが実施されます。理事長講演では、本学会の理事長になられました影山隆之先生(大分県立看護科学大学教授)のご講演が行われます。教育講演では、青木豊先生(目白大学教授／精神科医)に「乳幼児のアタッチメントと精神医療」と題した講演を、記念講演では、杉山春先生(ライター)に「児童虐待死事件からみえてきた家族と社会」と題した講演をいただきます。また、この日は元永拓郎先生(帝京大学教授)を中心としたシンポジウム「多職種チームにおける公認心理師への期待と課題」も行われる予定です。

※16 日昼に理事会、17 日昼に総会を行います。

公認心理師制度推進連盟総会のご報告

常任理事 早川東作、菅野 恵

2018年10月5日に東京交通会館にて第52回総会が開催されましたのでご報告いたします。本学会が加盟していました「臨床心理職国家資格推進連絡協議会」は、公認心理師の国家資格化に伴い「公認心理師制度推進連盟」(略称:「推進連」)へ名称変更しました。また役員選挙が行われ、会長として鶴光代氏が選任され、日本家族心理学会、日本心理臨床学会、日本臨床心理士会、日本人間性心理学会、日本カウンセリング学会の5団体が幹事団体となりました。

さて、今回の総会ではまず各団体による報告があり、本学会からは2019年2月に開催される第34回大会にて公認心理師の多職種連携をテーマにしたシンポジウムを行う予定であることを報告しました。主な議題としては、公認心理師の関連団体の動向として職能団体と養成教員団体の発足が各方面で模索されていることについて情報交換が行われ、望ましいあり方について活発な議論が交わされました。同時に、既存資格である「臨床心理士」をしっかり支援していくという方向性も確認されました。「日本心理学諸学会連合」の会合を2018年12月に控え、各団体による対立構造が懸念される中、今後の動向を注視していく必要性を感じました。



学会主催のワークショップを開催しました

研修担当理事 加藤 純、福島眞澄

2018年10月28日(日)に、日本精神衛生学会主催のワークショップ(WS)を2本立てで開催しました。

会場は東京・お茶の水にある中央大学駿河台記念館でした。午前のWSの参加者は10名、午後のWSの参加者は20名でした。この内9名は午前・午後と通しての参加でした。

午前のWSは10時から12時30分までの2時間半でした。まず、菅野恵氏(和光大学)による発題があり、児童養護施設で職員の理解と協力を得て研究し、成果を職員に共有して実践に役立ててもらっていることが報告されました。草海由香里氏(法政大学大学院)の発題では、多様な研究を受け入れる学会誌『こころの健康』の懐の広さに魅力を感じ投稿し、査読により論文が精緻化された経験を元に、学会誌に投稿する意義について報告されました。

発題に続き、2つのグループに分かれて発題者を囲み、質疑応答やディスカッションをしました。草海氏を囲むグループには元永拓郎氏(帝京大学)が、菅野氏を囲むグループには中野良吾氏(創価大学)が講師として加わり進行や助言を担当しました。

午後のWSは13時から18時までの5時間、荒川歩氏(武蔵野美術大学)を講師に招き、質的データの分析方法として注目されている複線径路・等至性モデル(TEM)について学びました。冒頭1時間ほどの講義があり、質的研究には個別性を大切にする研究から普遍性を目指す研究まで幅広く、目的によって適切な分析方法を選ぶ必要があることを学びました。TEMは個別性を志向する研究にも普遍性を目指す研究にも活用できるそうです。

講義の後、4班に分かれて **TEM** 図を作成しました。ある県にIターンをした3人の体験談を素材として、まずA4半分の紙に記された体験談を意味のまとまり毎に鋏で切り分け切片化しました。切片化したデータを時系列に左から右に並べます。3人のデータを比較しながら時間軸を揃え、切片化したデータ間を線で結んでいきました。そうすると、Iターンを思い立ち、移住後に苦勞し、新しい生活に馴染んでいく過程が図に描き出されました。時間ぎりぎりまで熱のこもった作業が続きました。完成後、4つの班が作成した **TEM** 図をお互いに見学しました。班によって着眼点が違って特徴のある **TEM** 図が作られていました。

教育や医療、司法など分野の違いを超え、関心を共有して、活発な意見交換をしてくださった参加者の皆様、ありがとうございました。多忙な中また遠方から駆けつけて発題をしてくださった草海先生と菅野先生、講師を務めてくださった元永先生、中野先生、荒川先生に感謝申し上げます。また、受付と会場係を気持ちよく担当して下さった和光大学の院生さんたちにも感謝申し上げます。2月の第34回大会で再会できると嬉しいです。

2019 年度にもワークショップを開催します。計画が決まりましたら本学会のウェブサイトを通してお知らせします。ぜひ、ご参加ください。

ワークショップを振り返って

京都大学大学院人間・環境学研究科

公立学校スクールカウンセラー 内海有弘

私は普段 **SC** として小中高校で勤務をしている。一般的にも周知されているが、私の現場でもいじめ、不登校、虐待、発達や人格の課題など児童生徒を取り巻く課題が存在しその対策が求められている。そのためには、本質的な解明とそれを基にした実践が不可欠であると考えている。だがその研究協力はなかなか得にくい。つい我々は児童生徒を取り巻く課題解決に注視しがちである。私はこの解明の研究に伴う困難にこそ課題解決の鍵、換言すれば本質的な抵抗が潜んでいるのではないかと考えている。慎重さを要する倫理性、人権だけではない要素を見逃さず解明することが重要と感じている。その意味で今回のワークショップ(**WS**)に関心をもち上京した。

午前は菅野恵先生、草海由香里先生による「実践を論文にするためのヒント、研究成果を広め・活かすためのヒント」をテーマにした発題と分科会、午後は荒川歩先生による「豊かな実践を育む質的研究手法～複線経路・等至性アプローチ入門～」というテーマで理論背景講義と実践を受講した。

午前は、私は菅野先生、中野先生の分科会に参加した。菅野先生の 15 年にも及ぶ児童福祉施設での実践、葛藤、工夫、懇親から積み上げて来られた調査研究の経緯と問題意識についてのお話、さらに生徒よりまず教職員との協力による研究へのご助言はたいへん有益であった。教育現場ではチーム学校という体制の方向性にある。そのため **SC** と教職員、そして **PTA** 役員との連携もこれまでより発展しつつある。時間は要すると予測されるが、菅野先生の取り組みをヒントにした工夫、積み上げは教職員、**PTA** の中で教育現場実践研究の必要性、問題意識の高まりに結びつく可能性を感じた。それが課題解決の鍵の糸口につながることを期待したい。また、分科会では精神衛生学会ならではの幅広い領域で活動する学会員と時間をかけた論議ができ有意義なものであった。

午後は、荒川歩先生の **WS** は実践だけでも 4 時間にも及ぶ研修であった。私の不勉強で **TEM** 図は初めてで興味を持って参加した。講義は難しく感じるところもあったが、演習では質的研究の経験の有無に応じて 4 班に分かれて、I ターンをした 3 人の逐語をもとに **TEM** 図を作成した。まず逐語を切片化して各自の視点に応じて事象をつないで線を引いていく。等至点、分岐点、必須通過点などが形

成され、各班により質の異なる **TEM** 図が作成され興味深いものであった。頭の中で検討するより客観化しやすく、視点に応じた事例の意味を検討しやすくなるという利点を持つ取り組みやすい方法で盛り上がった。活用者は主観的な視点から距離をもち、エビデンスと客観性に留意しながら **TEM** 図の作成していくことで、質的な意義が損なわれないようにする必要性は感じた。

有意義な **WS** に参加させていただきありがとうございました。

